The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	地域のボランタリーな子育て活動がもつコミュニティづくりの可能性 ： 「冒険遊び場」活動に取り組むあるグループを事例として
Author(s)	牧野, 紀之
Citation	大阪大学教育学年報. 2004, 9, p. 139-148
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報 第9号（2004年）
Annals of Educational Studies Vol.9

地域のボランタリーな子育て活動がもつコミュニティづくりの可能性

－「冒険遊び場」活動に取り組むあるグループを事例として－

牧 野 紀 之

【要旨】

本稿は、地域で「冒険遊び場」と呼ばれる遊び場づくりの活動に取り組むあるグループを取り上げる。それは、ボランタリーな個人によって構成されており、またその活動はコミュニティづくりへとつながっている。

このグループは組織的でない「緩やかな体制」という特徴を持ち、それは一見グループに不安定さをもたらすかに思えるものであるが、このグループの事例では、メンバーの自主的な態度と他のメンバーたちへの配慮によって、この「緩やかな体制」が活動を続けることを却って助けるものとしている。また、グループにはもうひとつ「よく話し合う」という特徴もあり、これらの特徴はお互いに関連しあっている。

活動を続けていく中で、メンバーたちは近隣住民たちと関わり、コミュニティの姿を実感していった。そして、自分たちの活動とコミュニティの関係についても実感していったのではないかと思われる。そしてグループは遊びに加え、信頼関係を大切にしながら、コミュニティづくりへの志向も持つようになっていった。

1．はじめに

人間にとっての社会や他者の存在は、個人が個人であるためにも必要不可欠なものである。しかし一方で、社会や他者は個人の自由を限定し、それに対立するものとして現れることも少なくない。近年コミュニティという言葉が一種の郷愁を持って語られることも少なくないと思われるが、共同体が人間にとって本質的に必要な何かを与えてくれるのと同時に、地域共同体という意味でのコミュニティは、かつてはいわゆる「しがらみ」などといったかたちで、個人の自由を抑圧する側面も持っていたことを忘れるべきではない。

しかし問題は、共同体を全否定してひたすら個人の自由の拡大を求めればよいという単純なものではなく、ここにおいて望まれているのは、個と対立しない共同体、個を個たらしめる共同体の在り方であり、個に対して我慢ではなく、満足と充実を与えるコミュニティである。この、個と対立しないコミュニティというテーマを考察するにあたって、個人が望んで共同的な行為に身を投じる、いわゆる「ボランタリー・アソシエーション」への注目は、重要な示唆を与えてくれるものと思われる。

本稿でとりあげるのは、地域において遊び場づくりの活動を行っているＡ会[1]というグループである。Ａ会は地域のＫ公園において、一般に「冒険遊び場」（または「プレーパーク」）[2]と呼ばれる自由な遊び場の開催を定期的に行っているグループである。活動を始めてから今年で10年めとなるこのグループは、子どもたちに豊かな遊びの機会を提供するにとどまらず、活動を通じて地域に人の輪を広げ、子育てのうえでも支えとなるようなコミュニティをつくり出していっている。

筆者は、2001年度にＫ公園があるＭ市教育委員会に非常勤職員として勤務したことをきっかけとしてＡ会と出会い、2002年４月より、調査研究のため同グループの活動への参与観察とメンバーへのインタビューを行ってきた。参与観察は、定期的に開催される「遊び場」[3]のみならず、毎月の定例会を初めとする、関連する話し合いや準備作業などにも可能な限り参加するよう努めた。調査ではそれぞれのボランタリーな参加に基づくＡ会の活動が、何によって支えられているかに焦点を当て、そのため「冒険遊び場」に関する研究でしばしば中心となる子どもたちの遊びではなくむしろ、その場をつくり出している大人たちが主な調査対象となった。本稿では、このグループの概要と現在に至る経緯を紹介し、その中で、活動を支える要素について若干の考察を加えていきたいと思う。

2．K公園で開催される「遊び場」

K公園は、住宅街の中の、神社の裏手に位置する公園である。かつて神社の鎮守の森の一部であったその公園は、今も、たくさんの樹木と自然の起伏が残る緑豊かな公園である。公園は、全体が丘状になっていて、周囲よりも一段高くなっている。入り口から直接中の様子をみることができないため、公園自体がちょっとした隠れ家的な雰囲気を持っている。入り口から樹々に囲まれた坂道を少し登り、丘の頂上に至ると、そこには幅、奥行き、共に20メートルほどの平らな広場があり、砂場、東屋、ベンチ、トイレなどの設備がその周囲に控えめに置かれている。広場の奥は高低差数メートルの自然の谷になっていて、雑木林だった頃の雰囲気を今も残している。谷間の一部には、広場から谷底に降りる階段と一体化された遊具が設置されている。この遊具は、モンキーブリッジや滑り台などが組み合わされたもので、ほとんどの部分が木製であるため、周囲の樹々と土の地面によく調和している。谷底に降りるためにはこの遊具の階段を使う他に、右手に迂回して緩やかな坂道を下るか、あるいは左手のやや急な崖を下るという方法もある。この公園の樹は落葉樹が多く、秋には無数のドングリが落ち、地面は落ち葉で埋め尽くされる。谷間には特に多くの落ち葉がたまり、この落ち葉と、樹々がもたらす陰のおかげで、谷間の地面は常時適度な湿り気を帯びている。

普段はどちらかといえば静かなK公園も、毎月第2土曜日とその翌日の日曜日には、多くの子どもたちと大人たちが集うにぎやかな「サロン」（社交の場）となる。その2日間、K公園は子どもも大人も自由にあそぶ「遊び場」の会場となり、人びとはそこに集まっているのである。

この「遊び場」を毎月開催しているA会というグループは、地域の子育て活動（子ども文庫、子育てサークル、絵本の読み聞かせなど）で知り合った保護者たちを中心として1994年に発足したグループである。現在A会は、遊び盛りの子どもを持つ保護者の他に、その保護者たちよりも少し上の世代の地域の大人や青年、大学生なども含む40人程[(4)]のグループとなっている。

「遊び場」の様子を言葉で描くのは難しい。遊びには決まったかたちはない。広場ではドッヂボールが行われることもあれば、三角ベースや大縄跳びが行われることもある。一輪車や自動車のおもちゃ、竹馬などが走り（歩き）まわるために使われることもあれば、落ち葉を集めたプールとジャンプ台がつくられることもある。砂場では山やトンネルがつくられているかと思えば、そのうちに水が流し込まれて川や湖になり、いつの間にか落とし穴がつくられている事もある。谷間に至る急な斜面は、段ボールを敷いたりしてスリル満点の滑り台になることもあれば、崖登りを楽しむ場所にもなる。上の広場から目につきにくい谷間の遊具とその周辺は、子どもたちが段ボールを使ったり、遊具の一部を利用したりして、「基地」や隠れ家を作るのに向いている。また自然の雰囲気が強く残る谷間では、ただぶらぶらしたり、様々な種類の追いかけっこをする姿もよく見られる。

比較的決まったかたちをしているものもある。例えば立ち木にロープを結びつけてその日につくられる手作りのブランコや、広場の一画におかれた卓球台での遊び、また木工台の周辺での工作などである。とはいえ、卓球も、競技で決められたような1対1や2対2の打ち合いばかりではない。「ハンデ」としてなのか、フライパンや木の板などの「普通ではない」ラケットで打ち合ってみたり、時には、一輪車に乗りながらラリーをする姿が見られたこともある。木工にしても、そこで作られるものには剣や弓矢、竹とんぼといった、比較的繰り返し作られるものもあるが、ただ無心にのこぎりや釘を使い、何と表現したらよいのか迷うような造形物を作っていることも多い。むしろ、板を切ったり釘を打ち込んだりする作業は、何かをつくるという目的のための過程ではなく、それ自体が目的であり、遊びであるのかもしれない。いずれにしても、やりたいと思う人がいる時にはやっているし、いない時には何も行われない。そしていつの間にか新しいことが始まっている。さらに、何もしないでいる、あるいはただおしゃべりをする、というのも、ここでは十分正当な過ごし方である。

「遊び場」では「食」も重要な要素である。広場の片隅に設置された「かまど」では、A会メンバーである母親たちが中心となって、昼食のための料理をしている。一抱えもある大きな鍋を使った「汁物」（みそ汁、中華スープ、カレーなど）と、持ち寄った材料を銘々が金網にのせて焼く「焼き物」が定番である。汁物に入れる具材は参加者が持ち寄ったものである。あとはおにぎりを持ってくれば、公園で昼食

をすませ、朝から夕方まで一日K公園で遊ぶことができる。しかし、「遊び場」に来る時間、帰る時間は自由であるので、気が向かなければもちろん、そうしなくても構わない。さらに、食べ物が傷みやすい夏場以外は、竹の棒にパン種を巻き付け、自分で焼いてつくるパン（「あそぼうパン」と呼ばれる）もあり、熾（おき）が入ったドラム缶を大人や子どもがぐるりと囲んで、パン種をあぶっている姿もしばしば見られる。

「遊び場」に参加する一日あたりの人数は、子どもと大人あわせて100人から150人前後であることが多い[5]。近隣から徒歩や自転車でやってくる小学生くらいまでの子どもとその保護者の割合が高く、中学生以上の子どもの人数は比較的少ない。子どもが小さい場合にはもちろん保護者が一緒についてくる場合が多いが、ある程度大きな子どもたちは、一人で、あるいは友だちと連れ立ってやってくることもある。また反対に、常連の保護者や近隣に住む大人、青年や大学生が、大人だけでやってくることもある。かつて常連の小学生だった子どもが、中学生や高校生になって訪れることもある。

K公園において開催されている「遊び場」は、一般に「冒険遊び場」と呼ばれるものの一種である。その内容から、参加者の中で多くを占めるのが小学生以下の比較的小さな子どもであるのは当然であるが、K公園で開催されている「遊び場」は、他地域において開催されている同様の取り組みに比較して大人の人数が多いといわれる。これは、この１年あまりの間にK公園を訪れた、他の「冒険遊び場」をみてきた学生や研究者の多くが共通して持った印象である。K公園の「遊び場」に来ている大人たちには、いわゆる「運営側」に相当するA会のメンバー、子どもを連れてきた保護者、そして「遊び場」に集う子どもたちや大人たちに会うために顔を出した様々な立場の大人たち、がいる。ただし、それぞれの間の区分はそれほどはっきりしているわけではない。「運営側」のA会のメンバーも、一方ではその地域に住む母親や父親、あるいはその他の地域住民であり、同じように近所から訪れる他の大人や子どもと一緒におしゃべりをしたり、くつろいだりすることに彼らが使う時間も少なくない。また、A会のメンバーではない大人も、できる範囲で準備や片づけを手伝ったりする様子は自然に見られる。

3．A会の組織的特徴

「遊び場」において、大人たちの区分が見た目にあまりはっきりしないのは、部分的には意図的なところもある。会をあまり組織立たせないようにしている、というのはA会の特徴の一つであり、これは、枠組みのしっかりした組織であることよりも、一人一人の個人の（気持ちに基づいた）集まりであることを大切にしている、といういい方をすることも出来る。ここではその特徴を「緩やかな構造」と表現することにする。

この「緩やかな構造」のひとつの表れとして、A会では、対外的な窓口となる「連絡先」[6]と、予算を預かり出費を記録する「会計」などの必要最小限と思われる以上の役職や係をできるだけ設けないようにしている[7]。また当番制もとられず、毎月の「遊び場」の開催の時は、開催日の少し前に、当日の都合についてお互いに確認し、最低限必要な人数が集まるかその都度確かめるようにしている。また「遊び場」開催の当日も、料理をする係、子どもの工作をみる係、子どもと一緒にドッヂボールをする係、というものが決まっているわけではない。それぞれが状況を見て、自分のできること、したいことをするようにしている。

それぞれのメンバーの責任と役割を明確にしない、この「緩やかな構造」は、一見すると非常に不安定で脆いものであり、現在まで９年以上にわたって定期的な活動を続けて来られたのは、不思議なことのようにも思える。A会においてこの「緩やかな構造」での運営は、メンバーが自発的な意志で会の活動に関わり、お互いに他のメンバーの状態に配慮して、会の活動についての全体的な視野の下で各自の行動を調整しようとすることによって支えられている。もともとA会においてこうした「緩やかな構造」をとるようになった理由の一つは、メンバーそれぞれの都合や主体的な意志（気持ち）を尊重するためである。しかし一方、役割を固定しないということは、メンバーの個性や主体性を活かし、それにより、お互いの助け合いの感覚と活動のおもしろさを生み出す素地となる可能性もあるといえる。

また、こうした緩やかな体制は、会のメンバーとそれ以外との敷居を低くする効果も果たしている。実際、発足以後A会に関わるようになったメンバーに、関わるようになった経緯と理由を尋ねたインタビューの中でも、「このくらいなら私にもできるかな」というかたちで入ってきた、という答が聞かれた。A会に入ったからといって直ちに何かの係があるというわけではなく、いきなり難しい仕事を任されるわけではない。最初は自分でできると思われるところを手伝い、そのうちに、より多くのことを引き受けるようにもなっていく。

また、この「緩やかな体制」に関連したA会の特徴として、「頻繁で深い話し合い」というものをあげることができる。A会では、いわゆる役員や幹部という体制は置いていないため、基本的に会のメンバー皆での話し合いと合意によって物事を決めていく。しかし当然ながら、簡単に結論が出る問題ばかりではない。典型的なのは、「遊び場」における安全管理の問題である。「遊び場」における大きな怪我や事故は、場合によってはその子の将来を左右してしまう可能性さえあり、当然、できるだけ避けなければならないことである。しかし同時に、「危なさ」はスリルと表裏であり、遊びの重要な要素の一つを形作る。そして、「危なさ」をなくすために次々と禁止事項をつくっていったのでは、そもそも「冒険遊び場」を行う基本的な理念が台無しになってしまう。「遊び場」における安全管理の具体的な対策としては、目に見えない危険をできるだけ取り除き、本当に危ないと思った時には声をかけられるようにする、などがとられることになるのであるが、この規準は人によって異なるため、なかなか結論を出すことができない。

しかし、この「結論が出せない」ということは、A会の中ではそれほど問題視されてはいないようである。というのも、話し合いの目的は、一律のルールを作ることではなく、メンバーそれぞれのもっている価値観（この場合は「危なさ」について）を交流し、問題に対する感性を磨くこと（この場合、緊張感を持って遊びを見守っていることができ、本当に危ない時には声をかけることが出来ること）にあるかのように思われるからである。もちろん、大きな怪我がおこった時などは、再発を防ぐために徹底的に話し合われる。しかし、「遊び場」の良さを失わないため、「ルールによる制御」ではなく「人による（臨機応変な）制御」に落ち着くことが多い。そして「人による制御」をするためには、あらゆる可能性と考え方について、話し合い、考えておく必要があるのである。

同時に、そのような話し合いを重ねていくことは、「こういう時この人はこんな風にいうのではないか」というような、メンバー相互のより深い理解につながっていく。メンバーへのインタビューでも、この深い理解とそれに基づく信頼感は、なかなか他の所では得難いものであったという声が複数聞かれた。

さらに、よく話しあうのは、必ずしも会議の時ばかりではない。メンバーたちの多くは、近所の主婦同士として、買い物の途中、学校の参観や幼稚園のお迎え、S公民館などで行われている、地域の社会教育活動の場、などでしばしば顔をあわせる機会を持っている。そうした機会の日常的な会話の中でA会についての話がされることもあり、そのように繰り返し話す機会があるということが、お互いの理解をより深め、情緒的な面も含めて、信頼関係を築いていくはたらきを持っているものと思われる。

4．A会設立への経緯

このA会設立の経緯を、当時からのメンバーへのインタビューから簡単に振り返ってみる。A会は、1994年、地域の子育て活動で知り合いになっていた6人の母親と2人の父親（2組の夫婦と4人の母親）合計8人[8]で発足した。A会が活動している地域では、以前から子ども文庫活動や子育てサークルなど、子育てに関わる地域活動が盛んに行われていた。これに関しては、K公園から歩いて10分ほどの場所にあるS公民館の存在も大きかったようである。S公民館はM市の社会教育施設であり、市立の幼稚園・保育所と隣接するという立地も手伝ってか、A会が活動を始めるよりも以前より、成人教育ばかりでなく、子育てに関わる地域活動の拠点として活用されていたという。

地域の子育て関連の活動で知り合いになっていた彼女らがこうした活動を始める直接のきっかけとなったのは、1993年度の秋にM市の教育委員会主催で行われた「子どもと遊び」をテーマとした連続講座での中での、「羽根木プレーパーク」の話であったという。その回では、「羽根木プレーパーク」から講師が招

かれ、「冒険遊び場」と呼ばれる遊び場について、そして「羽根木プレーパーク」で自由にあそぶ子どもたちの姿が紹介された。

「羽根木プレーパーク」は、日本で初の常設の「冒険遊び場」であり、日本の他の多くの「冒険遊び場」にとって、モデル的な位置にあると思われるものである。「羽根木プレーパーク」の創設にも関わった大村璋子は、「冒険遊び場」について以下のように説明する。

（「冒険遊び場」とは）しつらえられた遊び場ではなく、子ども自身が自分で創造していく遊び場である。現在の都市社会のなかではしにくいいろんなこと 例えば、廃材で小屋づくり、動物の飼育、植物の栽培、たき火や料理、穴掘りや木登りなどができる。プレーリーダー(9)とおしゃべりしたり、何もしないでボーッとしていることもできる。自分のしたいことを、自分のやり方で、マイペースでできる遊び場である。（大村2000、２頁）

理念としての「冒険遊び場」の背景には、子どもが感性や想像力、様々な社会性を養うためには「遊び」が不可欠であるが、そのための環境が貧しくなっているという社会状況がある。自然環境の喪失は言うに及ばず、かつて重要な子どもの遊び場であった路地は自動車の行き交う道路になり、公園に立てられた看板には数々の禁止事項が並ぶ。「冒険遊び場」はこうした社会状況のなか、子どもの自由な遊びを保障していくためにつくられているものである。その理念は、「羽根木プレーパーク」では「自分の責任で自由に遊ぶ」という言葉で端的に表現されている。

Ａ会のメンバーたちが住む地域は、まだ比較的緑が多く残る地域であるといわれるが、それでも、子どもを遊ばせにくい環境を感じることはしばしばあったという。自分の子どもをもっと自由に遊ばせたいと感じていた母親たちにとって、講座で語られた「冒険遊び場」の姿は、非常に魅力的に感じられたようである。講座の後、参加した母親の中には、それぞれ小さな子どもを連れて実際に「羽根木プレーパーク」を見に行った者もいたということである。後にＡ会を立ち上げたメンバーたちは、講座が終わった後も、Ｓ公民館などで日常的に顔をあわせる機会を持っていた。そしてそうした場面での日常的な会話のなかで、講座に参加することで広がった遊びについての思いをお互いに交流していった。それは直ちに行動として表面化することはなかったものの、自分たちの地域にもこんな遊び場（「冒険遊び場」）が欲しい、という気持ちは、講座に参加した母親たちの間で育まれていったということである。

年が明けて1994年３月、Ａ会が活動している地域にあるＳ公民館では、Ｓ公民館に関わる地域の子育て活動のサークルやグループらによる恒例のイベント（本稿中においては「こどもまつり」と呼ぶことにする）が開催された。Ａ会を立ち上げたメンバーたち（母親たち）も、Ｓ公民館などで行われていた子育て活動に参加していた関係から「こどもまつり」の運営に関わり、その年度の「こどもまつり」終了後、同席していた当時の行政（教育委員会）関係者とメンバーたちの間で、遊び場づくりについての話題がふたたび出された。「やったらよろしいやん」「書類の書き方なんかは僕が教えるから」と、行政関係者の後押しもあり、遊び場づくりに向けて本格的な活動が開始されることになった。

活動場所として、近所のいくつかの候補地のなかから、Ｋ公園が選ばれた。Ｋ公園は周囲からの見通しが悪く、当時は利用者も少なく、少し怖い雰囲気もあるような、小学生が一人で行ってはいけないとされている公園であった。ただそれ以上に、自然の丘陵を残した起伏に富んだ地勢やそこに生える樹々、主張しすぎない遊具や設備の配置など、遊び場としての可能性を感じさせる公園であり、その魅力が決め手となったという。

公園という公共の場所を（私的な目的のためではないとはいえ）民間の一団体が使用するのであるから、市から特別に占有許可を受ける必要がある。また、「冒険遊び場」のような活動のために公園を使用することは少々異例なことではあった。しかし、公園の管理を担当する課（公園課(10)）が前向きに対応してくれたこともあり、「こどもまつり」終了からまだそれほど間がない５月に、第１回の「遊び場」を開催することが可能となった。最初に公園課に相談に行く際には、前述の教育委員会の関係者が橋渡しの役を果たしたという。その背景には、それまでのＳ公民館などでの子育て活動を通じてＡ会メンバーの人たちとその教育委員会関係者との間に築いていた信頼関係があったと思われる。公園課との間で協働的に話し合

いを進めていくことができたのは、この橋渡しに加え、公園課の当時の課長をはじめとする職員の人々の意識、役所の人たちを困らせてはいけないという気持ちに基づいてA会が工夫して行動したこと、などの要因があった。

ともあれ、市役所からの許可も得て、K公園周辺の世帯に挨拶をし、近くの小学校の校門前で子どもたちに案内のチラシをくばり、遊び道具となる段ボールなどを大量に集め、当日を迎えた。A会のメンバーたちは、初めての試みでもあり不安もあったようであるが、結果は2日間で延べ200人以上の子どもたちが遊びに来るという盛況ぶりであったという。以降、基本的には月に1度、2日間ずつの開催を続けて現在に至っている。

5．ターニングポイント：倉庫の設置[11]

K公園には一つだけ、A会の活動のための設備がおかれている。広場の片隅におかれている「森」と「木」をテーマとしたペイントが施された倉庫がそれであり、A会が活動を開始してから3年後の1997年5月に設置されたものである。「冒険遊び場」にとって、遊び道具をしまっておける倉庫は非常に重要な設備である。それがあるのとないのとでは、開催の準備と片付けに必要とされる労力に大きな差が出てくるし、開催していない期間に遊び道具をしまっておく収納場所も問題となる。A会の場合、開催していない期間の収納場所については、近くに住む方がアパートの一室を無償で提供してくれるという幸運に恵まれたものの、K公園にA会の倉庫が設置されるまでは、「遊び場」開催のために毎回、リヤカーや軽トラックを使って、何人もが手分けをしながら、収納場所から公園まで何回も往復して準備をしていたという。そしてもちろん、片付けにもそれだけの手間を要する。準備と片付けに手間がかかるということは、単にA会のメンバーにとって負担になるというだけでなく、例えば天候が少しでも怪しくなった時にはすぐに片付けを開始しなくてはならず、回復しても再会することが難しい、であるとか、まだ明るい早い時間に活動を切り上げて片付けに入らなくてはならない、などといった状況をもたらし、倉庫の設置は、子どもたちに少しでもたくさん遊んでもらいたいという気持ちからも望まれるものであった。

とはいえ、K公園はA会の「遊び場」だけのための場所ではなく、地域住民皆のための公園である。その場所に建造物を設置してしまうというのは、やはり大きな問題であった。A会では、公園課や教育委員会などと相談を重ね、設置・管理の方法についてより問題の少ない方法を検討していった。そして、「『倉庫の設置が、公園管理上の問題を発生させないよう法令等の規定に従い、必要なすべての手続きをきちんと行う。』『設置の際の費用は、全額、A会で負担する。』『建てた後の管理は、すべてA会で対応する。』」[12]などの内容を具体的にまとめて、市役所と何度か相談した結果、1996年の秋に、市からの許可を得ることができた。この許可は、メンバーにとって思いがけず早くおりた決定であったそうである。

市との話し合いがついた後でも、A会のメンバーたちは、倉庫設置のためにしなくてはいけないことがまだ残っていると感じていた。というのも、それまで都市公園法について勉強したり、市役所の人々と相談したり、メンバーの間で話し合ったりする中で、「公園はみんなのもの」であり、自分たちが知らないところで様々な人が様々なかたちでK公園を利用している、そして自分たちのしている活動が例え「良いこと」であるとしても、それに甘えてK公園を利用する他の人びとの様々な思いをないがしろにしてはいけない、ということが、十分認識されていたからであると思われる。そのため、「誰が言い出したからというわけでもなく」、K公園への倉庫設置について、周辺住民の人々に説明をし、理解を求める必要がある、ということになり、倉庫設置のお知らせとそれについての意見の聴取を兼ねたアンケートを実施することになったという。

アンケートは、A会のメンバーが手分けをしてK公園の周辺の約130世帯に対して、その全てを一軒一軒直接訪れるかたちで行われた。冬の寒い時期のことでもあり、また、それまで必ずしも交流がなかった人々から、自分たちの行っている活動について直接意見を聞くのは、やはり強い不安と緊張を強いるものであったという。しかしその中で、K公園ができた際の経緯についてや、周辺に住むそれぞれの人にとってのK公園の意味についての話を聞くことができ、「公園は地域住民みんなのもの」であるということ、

自分たちとは違った角度から地域社会のことを考えている人々がたくさんいるということ、を改めて実感し、そうした地域社会の中での自分たちの活動の意味を改めて考えるきっかけにもなったという。

その年の4月、アンケートの結果とそれに対するA会の考え方、設置する倉庫の概要や維持管理方法の詳細などは文書にまとめられ、A会の活動を知ってもらうための、活動のきっかけ、思い、活動内容などをまとめた文書と併せ、アンケートを配った世帯へと返された。その際、反対の声を寄せていた人々には、メンバーが直接訪れ説明をするようにしたということである。結果必ずしも周辺の全ての人々が全面的に賛成してくれたというわけではないであろうが、A会は「一地域住民として」、「地域に住む人（個人）と人（個人）」の関係として自分たちの思いを伝え、それについてやはり「地域に住む人（個人）と人（個人）」の関係として意見を聞くという姿勢を貫くことはできたのではないかと思われる。そしてそれはおそらく、地域の人々のA会に対する信頼感に対して、少なくとも長期的にはプラスにはたらき、その活動が地域社会に受け入れられ、根付いていくためには重要なことであったのではないかと思われる。

そして翌月、ついに倉庫が設置される。土曜日に運び込まれた部品をA会のメンバーが朝から夕方前までかけて組み立て、翌日の日曜日にペイントを施した。このペイントも、公園という公共の場所に新たにものを置いてしまうことに対する配慮のひとつであった。前述のアンケートの中で、「公園の景観を損なうのではないか」という声があり、それに対して、少しでも周りの風景に溶け込むようにと、「森」と「木」をテーマとしたペイントをすることにしたのである。

土曜日に組み立てられた倉庫は、倉庫としては決して大きな部類ではない。しかし、緑あふれる公園の中にあっては、いかにも倉庫然とした真新しいベージュの壁面は周りから浮き上がり、設置場所に合わせて実際に寸法を確認していたものの、メンバーの多くにとって、できあがった倉庫は思ったよりも大きく見えたそうである。

日曜日のペイントには、できるだけ多くの人々に参加してもらい、より楽しいものをつくりあげたいという思いから、近隣の子どもたちにも声がかけられた。また、このペイントには、S公民館でA会のメンバーと顔なじみになっていた若者たちにも参加してもらったそうである。彼らは、S公民館のロビーによくやってきて、友だちと話し込んだり、時間をつぶしたりしていた若者たちで、A会のメンバーが彼らに声をかけて参加することになったのであるが、当日は前もって準備した下書きをもって現れ、見事に一面を仕上げてくれたそうである。ペイントされた倉庫は、それまでよりもずっと周囲の景色に溶け込み、違和感は少なくなった。ペイントをしてよかったという声は、日常的にK公園を訪れていた地域住民の人からも聞かれたようである。

倉庫ができたことによって、活動時間に余裕を持つことができ、その年の夏から毎週金曜日午後にも遊び場の開催を始めることになった[13]。それにより、これまで土日にはなかなか出てくることができなかった人たちの参加があり、またそれが土日の「遊び場」への参加のきっかけとなることもあったという。さらに、すぐ手近に収納場所があることによって、子どもたちが自分で好きな遊び道具を運び出す（そしてしまう）といった変化も見られるようになったということである。さらに、メンバーたちには予想されていなかったことであるが、「遊び場」を開催していない時にも公園にある倉庫が、K公園を散歩に訪れた人々へA会の活動をさりげなくPRする、という効果もあったようである。

6．コミュニティづくりへの志向

この一連の、倉庫の設置をめぐる経験は、A会の歴史にとって非常に重要な意味を持っていたのではないかと思われる。この経験はまず、A会にとって二つの点について再確認の機会となったといえる。その第一は、地域に住む人々の生の声と顔とを感じることにより、一地域住民としての自分たちの活動の位置を再確認することになったということである。A会のメンバーたちの間では設立当初から、要求団体にはならないでおこう、という約束があったそうである。その意味するところは、力の関係で物事を進めず、それぞれの人と人とできちんと向き合って思いを伝え、できるだけお互いに納得できるかたちでよりよい解決法を見いだしていきたい、というものであろう。こうした約束を持つA会にとっては、市役所から許

可が出たといってもそれを免罪符として直ちに倉庫の設置へと進まず、周辺の住民の人々と直接向き合おうとしたのは、ある意味自然な流れだったのかも知れない。そして、それは必ずしも楽しい経験であったとは言えないものであるかもしれないが、それによって、同じ地域に住む他者の存在をより具体的に感じることとなった。その経験は、会が独りよがりな善意へと進んでいってしまうことに対する抑止力にもなっていくものであると思われる。第二は、信頼関係の重要性についての再確認である。倉庫の設置に関しては、結果として、表だってそれほど大きな反対の声はあがらなかった。しかし、A会のメンバーたちは後から聞いた話なのであるが、やはり苦々しく思った住民も、中にはいたそうである。その時は、普段の「遊び場」の活動をみていた他の住民が、「そんなに無茶をする人たちではないから、もう少し様子を見てみては」と抑えてくれたそうである。この住民たちは、普段A会のメンバーが接するのとは少し違う年齢層の人々であったため、メンバーたちは少し時間がたってからこの話を聞いたのであるが、普段から信頼されるようにきちんと活動していることによって、陰で応援してくれる人を得ることができ、また、その都度きちんと向き合うことで、長い目で見れば、よりしっかりした信頼感につながると感じることになったということである。

しかし一方で、倉庫ひとつとはいえ常設のものを置いてしまうというのは、A会の人々に対し、ある種の決意を迫るようなプレッシャーを与えるものでもあった。あるメンバーによればそれは、「こんなもの置いてしまって、もう、後戻りできへん」という感覚であったという。ここにおいてA会は、その進み方についてひとつの岐路に立たされていたと言うことができるかも知れない。すなわち、「次はいよいよ(「羽根木プレーパーク」のような)常設(の「冒険遊び場」の開設)に向かうのか」、という点である。

先述したように、東京都世田谷区の「羽根木プレーパーク」は、日本で最初の常設の「冒険遊び場」であり、世田谷区からの事業委託を受けた「世田谷ボランティア協会」が運営する「羽根木プレーパークの会」によって運営されている(14)。行政との協働によって専用の活動場所と専任のプレーリーダーとを置く「羽根木プレーパーク」は、日本の多くの「冒険遊び場」にとって、モデルケース的な位置づけを持っているといえる。確かに、常設によって「冒険遊び場」が子どもたちにとって日常的なものになれば、子どもの遊びはより充実したものになると思われる。A会のメンバーの中にも、実際に「羽根木プレーパーク」を訪れ、その様子を知っているものもいる。しかしA会は、常設化をめざすことはしなかった。

A会では、自分たちの実感や気持ちを大事にしている。自分たちが活動をしているのは、自分たちの「やりたい」という気持ちに基づいてやっているのであって、自分たちの気持ち以上の負担を引き受けてしまえばそれが重荷となり、「やりたい」という気持ちと活動との主従が逆転してしまう。その結果、活動が楽しく長続きするものでなくなってしまい、本質が失われてしまうという意識が、文化として共有されている。そして話し合いの場面でも、この基準に基づいて方針が話し合われる。これは必ずしもA会独自のものであるというわけではなく、例えばそれ以前から地域で行われていた子ども文庫活動(15)などから受け継がれた文化でもある。

A会では、もう一度自分たちのやりたいことは何か、そしてそのためには何処までを負担と感じずに行うことができるか、を考え、現在までの所、月1回2日間の開催(と毎週金曜日の開催)以上の活動の拡大をおこなっていない。しかし、おそらくその選択は、地域に住まう他の人々の顔を見て、その人たちと人間対人間としての信頼関係を築くことの重要さを感じたA会の、ただ「遊び」だけではなく、「遊び場」を通じてコミュニティづくりに関わっていく、というより積極的な意味もあったのではないかと思われる。この、コミュニティづくりへの志向は、必ずしも倉庫設置のみをきっかけとして始まったものではないが、この一連の経験はその方向性に大きな影響を与えたのではないかと思われる。

7. おわりに

A会の開催する「遊び場」には、そこに参加する多くの子どもたちと大人たちにとって、リラックスした心地よい空気が流れている。それは、その場の物理的な環境とそこで行われている自由な活動(遊び)に加え、そこに集う人と人の関係によってもたらされているものである。メンバーへのインタビューの中

でも、A会の「居場所」としての心地よさを言及し、今後もA会に関わっていきたいという声がしばしば聞かれたが、それはメンバーが他のメンバーたちとの間に育んだ深い信頼関係によってもたらされているものであると言える。これは多分に情緒的な側面を含んだものであり、A会のメンバー内部に関していえば、その信頼関係は、共に活動を作り上げる経験と合わせて、「遊び場」のリラックスした場で火を囲み、食事を共にすることによってももたらされたものである。さらにこの信頼関係は、人と人との自然な気持ちに基づいた対面的な信頼関係と呼ぶべきものであり、これを大切にしているということは、A会の活動全般の中の随所で見受けられるものでもある。この事例において、その活動のテーマが遊びであることや、その活動において子どもたちが中に置かれているということは、その会の活動の成立に対する重要な要素ではある。しかし同時に、この事例の中にみられる個人の自発的な気持ちと他者への信頼関係に基づく集団のあり方は、他の様々な種類のテーマに基づく集団についても、示唆するところは大きいのではないかと思われる。

【注】

(1) 仮称。A会の名称には通称として使われるものと公式な場で使われるものとがあるが、本稿中ではA会に統一する。なお、以降に登場するK公園、M市、S公民館、も同様に仮称である。

(2) 「冒険遊び場」と「プレーパーク」とは、発祥の地ヨーロッパにおいては、本来別々の歴史をもつ言葉である。大村によれば、「“プレーパーク”は大きな公園の一画をより積極的に子どもの遊びに活用しようとして生まれた遊び場」（大村2000、3頁）であり、「“冒険遊び場”は、公園以外の土地、校庭や個人庭園のなか、公共施設や個人住宅の建設予定地などに設けられた自由な遊び場」（同所）である。ただし日本においてはこの2つの言葉は一体化して捉えられる傾向があり、また、概念として使われる場合もあれば、固有名詞の一部として使われる場合もある。以降本稿においては、固有名詞の一部として使われるなど特別の場合をのぞき、「冒険遊び場」という言葉を用いたいと思う。

(3) A会が第2土曜日とその次の日曜日に開催している「冒険遊び場」の本稿中の仮称。A会が開催する「冒険遊び場」は、金曜日に開催されるものもあるが、2003年11月現在では開催が不定期になっていることから、本稿中では特に土日に開催しているものを中心に取りあげていく。

(4) A会の連絡網に記載されている人数。A会には明確な会員規約のようなものはなく、入会や退会といったはっきりとした線引きはない。そのため、便宜的に打ち合わせなどの連絡をまわす範囲を集団の規模として採用した。

(5) A会の定例会（毎月行われる会議）での資料から。ただし受付を設置するなどして参加者を確認しているわけではないため、この数字は当日の印象や食材の減り具合などから推測した概数であり、定例会の際に出席者それぞれの印象を付き合わせて決定される。

(6) かつてはわかりやすいように「代表」という肩書きを使っていたが、現在ではこの呼び名は廃し、代わりに「連絡先」といういい方をしている。ただし、なんらかの手続きの都合上、対外的に必要がある場合には、「代表」といういい方をする場合もある。

(7) 実際にはその他にも、毎月発行するチラシを編集する人々も一定決まっているが、役割分担はその時の状況で流動的である。

(8) 活動を開始するにあたって市役所の関係課に提出した団体名簿に記載されていたメンバーの人数。ただし実際には、それ以前の地域の子育て活動が縁で知り合いになった人など、活動を支援する協力者がそれ以外に存在していた。

(9) プレーリーダーとは、子どもの自由な遊びを可能にするために「冒険遊び場」に配置されている大人である。プレーリーダーは有償のスタッフとして配置されている場合もあるが、無償のボランティアによって担われている場合もある。

(10) 現在M市において公園を管理している課の名称は「公園課」ではないが、本稿では公園の管理を担当する課の一般名称として「公園課」を用いる。

(11) 倉庫設置の経緯に関しては、メンバーへのインタビューに加え、2002年度のA会の総会において配られた、経緯をまとめた資料を参考としている。

(12) 2002年度A会総会資料より抜粋。

(13) 2003年12月現在、K公園における金曜日の定期的な遊び場開催は行っていない。これは、近くの幼稚園や小学校の終わる時間が変更になったこと、近くの別の公園が整備されたこと、などにより、参加者が少なくなったためである。

(14) 「世田谷ボランティア協会」は、他にも「世田谷プレーパーク」「駒沢はらっぱプレーパーク」といった、世田谷区の他のプレーパークの会も運営している。(大村2000)

(15) M市において15年ほど前に子ども文庫活動を始めた方が、K公園およびC公民館の近所に居住し、現在まで子ども文庫活動を初めとする地域の子育てに関わる活動に精力的に関わっている。発足当時からのA会のメンバーの多くもそうした活動と接点を持ち、活動のかたちよりもやりたいという気持ちを大切にするという文化の形成にはその方の存在も大きな影響があると思われる。

＜引用文献＞
大村璋子　2000　『“自分の責任で自由に遊ぶ” 遊び場づくりハンドブック』ぎょうせい

The possibility of community voluntary activity about child raising in building community

－The case of a group working to create an adventure playground－

MAKINO Noriyuki

In this paper, the author focuses on a group working to create an adventure playground in their district. The group is made up of voluntary individuals, and its activity is connected with building a community.

This group is characterized by its loose structure, which seems to bring insecurity to the group at first sight. But because of its members' independent attitude and regard for other members, its loose structure helps the members organize their activity. And also, frequent and deep dialogue among the members is another characteristic of the group, which is vitally interrelated with other characteristics.

In continuing their activity, the members were concerned with the neighborhood, and became aware of the importance of their community. They seem to have realized the significance of relating their activity to their community. As a result, the group has developed an orientation to building community as well as creating a plqyful environment by recognizing the importance of “trust”.